

平成 29 年度米国カリフォルニア州における 看護学生の海外研修報告

森山 小統子¹⁾, 佐藤 芙佐子²⁾, 小澤 淑子¹⁾, 林 暁子¹⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

2) 愛知医科大学 名誉教授

学生海外研修報告

平成 29 年度米国カリフォルニア州における 看護学生の海外研修報告

森山 小統子¹⁾, 佐藤 芙佐子²⁾, 小澤 淑子¹⁾, 林 暁子¹⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

2) 愛知医科大学 名誉教授

キーワード： 海外研修, 国際交流, 看護学生, 米国, 異文化交流, 多文化理解

要 旨

本学看護学部では平成 29 年度より国際交流活動を開始し, 平成 30 年 3 月に「米国における看護学生の海外研修」を初めて実施した。研修に参加した学生 6 名は, カリフォルニア州ロサンゼルス近郊にあるラ・ミラダ市で, ホームステイ体験をしながら大学や医療施設において学術交流および異文化交流を行った。学術交流として, バイオラ大学看護学部における講義や演習の聴講, コミッショニングセレモニーを見学した。さらに PIH (プリズビテリアン・インターコミュニティ・ホスピタル) およびマグネット・ホスピタルであるセント・ジョセフ病院, サウスベイ・ヘルスケアセンターにおいて視察を行った。本稿では, これらの研修内容について報告するとともに, 研修を通して明らかとなった米国の看護の実情, 学生の学びと自己成長について, さらに今後の国際交流活動を発展的に継続させるための課題について考察する。

I. はじめに

総務省は地域における多文化共生への取り組みを推進している¹⁾。日本に定住する外国人登録者数は年々増加しており、医療・看護においても多文化への対応のニーズはいつそう高まっていると考えられる。日本看護協会は、「看護者は国籍、人種・民族、宗教、信条、年齢、性別及び性的指向、社会的地位、経済的状态、ライフスタイル、健康問題の性質にかかわらず、対象となる人々に平等に看護を提供する」²⁾ことを明記している。日本看護系大学協議会では、看護学士課程におけるコアコンピテンシーとなる看護実践能力と卒業時到達目標の1つに「グローバル化・国際化の動向における看護のあり方について理解できること」を挙げている³⁾。これらから、看護系大学では、多様な文化をもつ人々に柔軟に対応できる看護職を育成していくことが求められており、国際交流を推進していくことは重要であると考ええる。

カルデナスらによる調査⁴⁾では、私立看護系大学の7割以上で組織的な国際交流活動が行われており、そのうち国際交流センター等の独立した組織部門を設置している大学は35.7%と最も多かった。次いで「看護教員・事務の組織」「看護教員・大学・事務の組織」「看護教員のみ」の順であることが報告された。また、各大学における国際交流活動の予算については、66.7%が学内予算による活動であり、国際交流活動の課題として活動を展開するための人材不足による教員への負担、資金不足、英語ができる教員の不足などが明らかとなった。

また、濱畑らの看護学生に対する国際交流についての意識調査⁵⁾では、「看護の実情を知りたい国」「学生研修を希望する国」として4割近い学生が米国と回答し、次いでヨーロッパが多かった。希望する研修費用としては、20万円以内を希望する学生が最も多かった。

山口らは、学生の海外研修に教員が引率することの意義について、語学力を磨き、国際的視座から柔軟に看護を捉えるきっかけとなることや、グローバル化に対応できる学生を育むには、まずは教員が看護におけるグローバル化の意義を経験的に理解し、視野を広げることが必要である⁶⁾と述べており、国際交流活動を通して学生と

もに教員の成長も期待されることが考えられる。

本学看護学部のディプロマポリシーでは、「国内外において国際的視野に立って看護を実践する素地を身につける」ことを教育目標の1つに掲げている。グローバルな人材育成を目指した国際交流活動は看護学部においても重要である。本学看護学部では平成29年度に国際交流委員会を発足させ、国際学術交流の一環として「米国における看護学生の海外研修」を企画・運営した。本稿では、その研修内容について報告するとともに、今後も国際交流活動を発展的に継続していくための課題について考察する。

II. 研修報告

1. 研修に向けた調整および学生支援

1) 研修施設の選定

本研修は、米国カリフォルニア州オレンジ郡ラ・ミラダ市にあるバイオラ大学とその周辺にある医療施設において実施することとなった。ロサンゼルス空港からのアクセスは車で1時間以内であり、治安のよい住宅街に位置する。日本の看護学生の短期研修を数回受け入れた実績があり、学術交流をするための研修施設として相応しいと考えられた。また、バイオラ大学看護学部生の臨地実習施設であるプリズビテリアン・インターコミュニティホスピタル（以下、PIHとする）、大学近郊にあり、質の高い看護を提供しているマグネット・ホスピタルであるセント・ジョセフ病院、日系アメリカ人が多く入所するサウスベイ・ヘルスケアセンター、日系アメリカ人の歴史を学ぶことができる全米日系人博物館を研修施設として選定した。

2) 研修参加者の決定

本学看護学部の学生2～4年生を対象とし、研修説明会を開催し、参加者10名を募った。志望動機書および面接によって参加意思を確認し、6名の学生（3年生2名、4年生4名）を決定した。

3) 研修日程

本研修は、平成 30 年 3 月 17 日（土）から 3 月 25 日（日）に実施し、8 泊 10 日の日程とした。日程の詳細は表 1 に記載している。3 月 17 日から 5 日間は、現地の方の協力を得てホームステイ体験を実施した。

表 1 平成 29 年度海外研修日程

日数	日付	内容
1	3/17 (土)	出国、ロサンゼルス着
2	3/18 (日)	ホストファミリーとの交流
3	3/19 (月)	プリズピテリアン・インターコミュニティ病院 (PIH) 研修
4	3/20 (火)	セント・ジョセフ病院研修
5	3/21 (水)	サウスベイ敬老看護施設研修 全米日系人博物館見学等
6	3/22 (木)	バイオラ大学研修
7	3/23 (金)	地域探査
8	3/24 (土)	バイオラ大学研修 フェアウェルパーティー
9	3/25 (日)	ロサンゼルス発
10	3/26 (月)	帰国、中部国際空港着

4) 研修プログラムの構築

本研修プログラムは、バイオラ大学で実施された他大学の海外研修プログラム⁷⁾を参考に、米国の医療・看護を熟知した教員によって各施設の研修コーディネーターと直接交渉しながら構築したものである。

5) 渡航前の学習支援

研修地域および研修施設の特性について、学生が主体となって学習する機会をつくった。また、英語担当教員による学習会（日常英会話、医療・看護の専門用語、自己紹介の方法等）を 15 時間実施した。さらに、マグネット・ホスピタルについて国際看護論担当の教員による講義を実施し、必要な知識の習得を図った。加えて、渡航前に 2 回のオリエンテーションを実施し、学生の準備状況を高めるための支援を行った。

2. 各施設における学術交流

1) バイオラ大学における研修

バイオラ大学は 1908 年に開設され、現在学生数は約 6,000 人、6 学部を有する総合大学である。看護学科は 1946 年に開設され、健康科学技術学部（School of Science, Technology and Health）に属する。キリスト教の信念を統合した看護実践を大切にしたい看護師（RN: Registered Nurse）を養成しており、卒業までに 4 年半を要する。看護学科が属する健康科学技術学部は 2017 年に新校舎が建設され、看護技術を学ぶための最新設備であるシミュレーションラボを備えている。学生は、集中治療室から分娩までさまざまな臨床の場を想定した環境で看護技術を学んでいる。

(1) 講義・演習の視察

本研修では、このシミュレーションラボでの演習を視察した。演習では、TA（Teaching Assistant）として 4 年生が下位学年を指導する役割を担っていた。4 年生はそれまでの臨地実習での経験から基礎的な看護技術を習得しており、教員とともに演習指導をすることによって教育実践能力やリーダーシップ能力を養う機会となっていると考えられた。バイオラ大学の学生は、臨地実習において投薬を含む様々な診療技術の実施が求められるため、臨地実習前には技術試験に合格しなければならない。また、実習と講義・演習が並行して行われるようなカリキュラムとなっており、知識と技術が統合しやすいカリキュラム編成になっている。日本では無資格の看護学生が臨地実習で点滴や投薬等の診療援助技術を実施することが難しい状況にあり、これらの技術は卒後に医療現場の中で技術習得していくことが一般的である。米国のように学生の時から様々な医療行為を実践できる機会に恵まれることで、学習への動機づけや卒業時の看護実践能力の向上、看護師としてのアイデンティティを早期から確立することに寄与すると考えられた。また、臨床を再現したシミュレーションラボがあることで、学生は学内演習時から具体的なイメージをもちながら技術演習に取り組むことができ、効果的な学習ができる環境となっていた。

講義の聴講では、Akiko Kobayashi 准教授の周手術期

看護に参加した。20名程度の少人数クラスであり、学生は各自ノートパソコンを持参し、事前に配信されている講義資料を映し出しながらペーパーレスで行われていた。学生は予習をした上で講義に臨むのが当然であり、教員は発問によって学生の理解を確認しながら講義を進めていた。学生から教員への質問も自由に行われ、教員と学生の対話による相互作用の中で効果的な講義が構築されており、アクティブ・ラーニングの実際を見ることができた。米国の看護学生の主体的な学習態度を目の当たりにした本学の学生にとっては大きな刺激となり、自身の学習態度を見つめ直すよい機会となっていた。

(2) 研修学生への講義

① 「米国の保険医療制度・RNの役割」

Kobayashi 准教授より、日米の保険医療制度の比較と米国の看護教育制度およびRNの役割・責任について講義を受けた。米国の病院には外来機能がなく、入院機能のみであることが一般的となっている。米国は日本のような国民皆保険制度ではなく、多くは、個人が加入する保険のタイプによって受けられる医療が決定されるシステムとなっており、受けられる医療サービスには個人差が生じる。また、多くの医師は病院に雇用されるのではなく、家庭医として継続して患者の診療にあたっており、担当患者が入院した場合、その医師が契約する病院で継続して治療を行うシステムとなっている。

病院でのRNの役割には、投薬・複雑なドレッシング剤交換・アセスメント・患者教育・CNA（Certified Nurse Aide）への看護業務の委任（ベッドメイキング・清拭・食事介助・歩行介助・排泄介助等）がある。さらに、専門教育を受けて認定されればRNでも気管内挿管や動脈血採血、化学療法の投薬が実施できる。日本の看護師と比較すると、個々のRNの自律性は非常に高く、患者の健康状態を的確に臨床判断し必要な医療やケアをマネジメントする力が求められ、重い責任を担っていることが理解できた。また、日本では医師のみにしかできない診療行為が看護師にも役割拡大されていることも重要な点であった。その一方で、患者の日常生活支援はCNAおよびLVN（Licensed Vocational Nurse）に移譲され、効率的に看護を提供する体制が築かれている。在院日数が非常に短い

米国においては、病院で働くRNは高度な急性期医療に対応できる力が特に求められている現状が理解できた。

② 「異文化理解と看護」

異文化看護を専門とする Anne Gewe 教授より講義を受けた（写真1）。日米の文化や価値観の相違、看護への活用について I. B. Mayer の基本的価値理論や M. M. Leininger のサンライズモデルを使い、学生と教員がともにディスカッションしながら考察を深めた。その中で、日本と異なる米国における看護教育の価値基盤には、「クリティカル・シンキング」「エビデンス・ベースド」「アクティブ・ラーニング」「システム思考」「自律性」があることを理解した。この過程を通して、学生はグローバルなものの見方や理論活用の方法を学び、自国の文化や価値を見つめ直す機会となった。



写真1 Anne 教授の講義

(3) コミッショニング・セレモニーの見学

バイオラ大学では、これまでの戴帽式に代わるコミッショニング・セレモニーを年1回実施しており、研修中にそのセレモニーを見学することができた。バイオラ大学の学生は2年間の教養科目や専門基礎科目を履修後、合格率が5割程度とも言われる厳しい試験に合格することで看護専門科目に進むことができる。看護専門科目に進み、これから臨床実習に出る学生に対してこのセレモニーが開催される。家族や友人が見守る中、学科長より学生一人一人にポケットサイズの聖書と聴診器が手渡される。聖書にはこれから始まる看護師としての歩みの中で、目の前の患者に対して、また看護師として自らが苦悩する時にいつでも祈りができるようにという思いが込められている。手渡される聴診器とは、新生児が初めて呼吸する音から、人の命が終わる最期の呼吸の音まで聴き

取る道具であり、看護の仕事の尊さが込められていた。厳粛さと祝福が入り混じった雰囲気の中でセレモニーが執り行われており、宗教的な儀式であるとともに看護職としての始まりを迎える大切な節目でもあった。臨地実習で学ぶことや看護師を目指すことへの思いを本人、家族、大学教員で共有できる機会をもつことは、今後、様々な困難に直面するだろう学生にとって非常に意義深いものであり、学生を支える家族や教員にとっても意義のあるものと感じられた。

2) プリスビテリアン・インターコミュニティ・ホスピタル (PIH) での研修

PIH は、第 2 次世界大戦後の軍人の療養施設として 1959 年に設立された病院である。現在は 500 床を有し、地域医療を担う有数の総合病院となっている。PIH では約 1,000 人の看護師が勤務しており、日勤・夜勤の 12 時間シフトとなっている。日本のように日勤と夜勤が混じった勤務形態ではなく、看護師は日勤と夜勤どちらかを選択し、週 3 日勤務している。さらに昼夜問わず 4 対 1 の看護体制となっており、日本に比べ非常に充実した体制であり、夜勤の負担も少ない。

(1) 看護師 (RN) へのシャドーイング

本研修では、PIH に勤務し、日本語通訳できる RN に協力依頼し、シャドーイング実習をさせてもらった。病棟内を視察し、実際のケア場面や退院カンファレンス等の見学をした。病室は全て個室であり、各病室にはパソコンが設置され、病室で一連の看護が完結できるような環境となっていた。プライマリー・ナーシング方式で看護が提供されており、入院から退院まで受け持ち RN が責任をもってケアマネジメントしていた。点滴や内服等の薬品類が管理される部屋は施錠され、ID カードによって入室する。看護記録や電話をかける部屋はスタッフステーションとは別室となっており、スタッフステーションにはクラークのみが常駐していた。ナースコールや家族からの問い合わせがあれば、各スタッフが携帯しているボイスセルラーフォン（音声認識通話機器）で迅速に担当 RN に連絡し対応するシステムとなっている。RN はパートナーを組む CNA とともに患者のケアを協働し、退院カン

ファレンスへの参加、医師への報告や指示受け等を中心に活動していた。日本では、チーム・ナーシングやパートナーシップ・ナーシング・システムなどチームで看護を提供する方式が主流であるが、米国ではプライマリー・ナーシングが基本である。日本では、患者ケアの公平性や平等性が重んじられる傾向にあり、看護師主体の効率的な看護方式を取り入れていることが考えられるが、個を重んじる米国では、患者の個別性を大切にしている看護方式が定着していると考えられる。米国では、個々の看護師の裁量が大きい分、責任も強く求められる。日本に比べ、個々の看護師の臨床判断能力やリーダーシップ能力がより求められることが理解できた。環境面では、安全管理に対する意識の高さを実感した。また、IT を駆使した看護業務の効率化が非常に進んでおり、学ぶべき点が多くあったと考える。効率化については、PIH にはモニターテックといわれる有資格者が院内に常駐しており、心電図モニター装着患者の波形観察をすべて委任されている。異常があれば担当 RN に迅速に報告し、対応するシステムとなっていた。スタッフステーションにある心電図モニタを常に気にしながら多くの患者を受け持ち、様々な業務に追われる日本の看護とは異なり、本来の看護師としての役割に従事できる環境となっていることが理解できた。

(2) 多文化への対応

米国、とくにカリフォルニア州では様々な人種や国籍をもつ住民が多く、医療面でも多文化への対応のニーズが高い現状にある。日本に比べ、働くスタッフも多国からの移住者が多く、多文化をもつ職場環境である。患者の治療方針を決定する際のインフォームド・コンセントの場面では、異なる言語を使う患者の場合に対応が困難となる。英語や主要な外国語であれば院内スタッフで対応できるが、そのような対応が難しい場合に、米国では医療通訳システムが利用できる。患者や医療スタッフは、モニタを通して医療通訳者からの支援を受けることができ、インフォームド・コンセントの際に活用されている。日本では多文化への対応はそれほど進んでいないと思われるが、在留外国人が増加する昨今、今後ますます多言語への対応が求められると考えられる。医療通訳者の養成や米国のような医療通訳システムの確立が急務であると考えられた。

3) セント・ジョセフ病院での研修

セント・ジョセフ病院はオレンジ郡にあり、1929年に聖ジョセフ教会のシスターによって設立された。米国で10番目に規模の大きい医療保健機関であるセント・ジョセフ・ヘルスが管轄する500床規模の総合病院であり、キリスト教精神に根差し、地域医療に貢献している。広い敷地内にはチャペルがあり、誰もがいつでも祈りができ、自然豊かな中庭やいたるところに絵画が設置され、穏やかな療養環境であった。また、セント・ジョセフ病院は看護の質が高いとされるマグネット・ホスピタルの認証を受けている。本研修では、院内の様々な施設を視察し、マグネット・ホスピタルについて、セント・ジョセフ病院における看護実践についての講義を受けることができたため報告する。

(1) マグネット・ホスピタルについて

マグネット・ホスピタルとは、米国看護師資格認定センター（ANCC: American Nurses Credentialing Center）によって認証された病院のことである。卓越した看護実践と患者アウトカムが認められた医療機関のみがANCCから認証を受けることができる。2018年において、全米6,300病院のうちマグネット・ホスピタルの認証を受けているのは475病院のみである。海外でも8病院が認証を受けているが、日本国内で認証を受けている病院はない。4年毎の更新制となっており、セント・ジョセフ病院は3期連続で認証を受け続けている。さらに2020年の4期目の更新に向けて現在準備が進められており、米国において看護の質が非常に高い病院の一つであると言える。

ANCCによるマグネット・モデル（図1）では、「構造的エンパワメント」「模範的でプロフェッショナルな実践」「新たな知識および革新と改善」「変革型リーダーシップ」が相互作用することによってよりよいアウトカムを実証していく看護実践モデルが示されている⁸⁾。また、この実践モデルを基盤にした14の評価項目があり、看護の質の評価には褥瘡発生率、転倒発生率、1患者1日当たりの看護ケア時間、患者満足度、看護師満足度などが含まれる。マグネット・ホスピタルの成果として、看護師の離職率の低下によって経験豊富な看護師や学歴のある看護師が蓄積され、このことが患者の合併症の減少による

良好なケア量のコントロールや在院日数の低下に繋がり、患者満足度を高めることに繋がり、安定した職場環境が形成されることとなる。

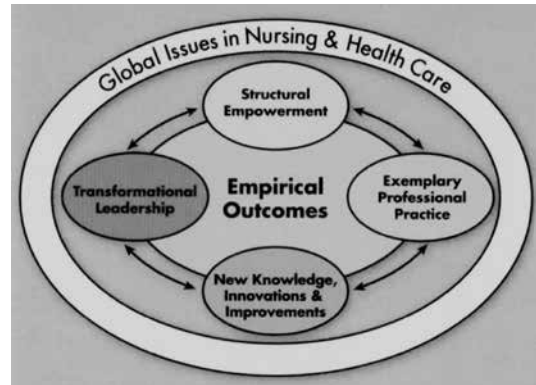


図1 ANCCによるマグネット・モデル

(2) セント・ジョセフ病院における看護実践

セント・ジョセフ病院では、マグネット・モデルを実践するために、ジーン・ワトソンのヒューマン・ケアリング看護理論の枠組みを活用した病院独自の看護実践モデルを構築している。患者、家族、コミュニティおよびケアチームに対する尊厳・サービス・正義・卓越性を看護実践モデルの中心に据え、よりよい多職種連携・看護実践・ケアリングによって看護の質を高めていくというものである。特に、看護師の臨床実践能力の向上、リーダーナースの育成に取り組んでいるほか、スタッフナースの代表者が看護管理者の会議に参加し、組織における意思決定に参画するShared-Governanceを実践しており、よりよい組織づくりを積極的に行っている。

マグネット・ホスピタルとして求められるものに、エビデンスに根差した看護実践がある。その一例として、セント・ジョセフ病院では患者の転倒予防を目的としたAIを活用している（写真2）。転倒リスクのある患者のベッドサイドにこのAIが搭載された機器を設置し、中央監視システムによって患者の行動を把握するものであり、このシステムの導入によって転倒患者が減少したというアウトカムが出されている。臨床研究の結果を看護実践に積極的に活用することの重要性と、そのことが患者中心の質の高いケアに繋がるということを改めて考える機会となった。



写真2 AIによる転倒予防のモニタリング機器

アウェルパーティーを開催した。開会時には、ホストファミリーにとって馴染みのある讃美歌を参加者全員で歌い、食事をともにしながら学生たちは感謝の思いをそれぞれが表現し、ともに過ごした（写真3）。



写真3 フェアウェルパーティーの様子

4) サウスベイ・ヘルスケアセンターでの研修

本センターは1996年に設立され、日系アメリカ人が多く居住するサウスベイ地区の高齢者を中心に施設ケアを提供している。在宅復帰を目指しリハビリテーションを行う中間施設としての機能と長期療養病床を有する100床の施設である。RN・LVN・CNAによって看護が提供されており、日系人の多い施設特性から、日本文化を取り入れた様々なアクティビティケアが行われていた。学生は日本語が話せる入所者と積極的にコミュニケーションを図り、入所者の故郷の話や傾聴し、現在の生活状況を見聞きしながら交流を図った。

3. 異文化交流

1) ホームステイ体験・フェアウェルパーティー

学生は現地でホームステイ体験をした。バイオラ大学の関連の教会組織に属するファミリーの協力を得て実現された。5日間、現地の家庭で生活をともにしながら、ロサンゼルス近郊の地域探査や教会での礼拝、ホームパーティーへの参加等、学生を温かく迎え入れてもらうことができた。ホームステイが初めての学生がほとんどであったが、ホストファミリーと様々な会話を楽しみ、お互いの文化に触れ合い、学生の積極的な姿勢が引き出される機会にもなった。ホームステイ最終日には、ホストファミリーやバイオラ大学教員への感謝の思いを込めて、フェ

2) 現地の看護学部生との交流

バイオラ大学での研修中、看護学部生を囲んでランチ交流する機会をもった。20名近くの学生が参加し、学生同士で日米での文化の相違や様々な情報交換をしていた。また、互いに看護学生としての思いを語り、看護師になることへのモチベーションを高め合う機会となった。

3) 全米日系人博物館（JANM）の視察

本研修における地域探査の一つとして、JANMの視察を行った。1800年代後半より1924年の「排日移民法」が施行されるまで、多くの日本人が職を求めてハワイや米国本土に移住する動きがあった。特に、カリフォルニアに移住した日本人は多く、大規模農場で労働者として働き、中にはその経営者として成功した者もあり、次第に日系人のコミュニティを形成した。しかし、第2次世界大戦が始まり、特に日本軍による真珠湾攻撃以降は米国における排日運動が高まり、日系人は強制収容所に収容され、過酷な環境での生活を余儀なくされた⁹⁾。このような日米の歴史について、本研修を通して初めて知る学生もおり、歴史的な知見を深めるよい機会となった。

III. 学生による研修評価

本研修の評価の明確化のため、研修終了時に参加学生を対象としたアンケートを実施した。アンケート内容は

研修日程・費用・研修内容・事前学習・研修における学び・自己成長等 18 項目であり、自由記述を含むものであった。その結果、研修プログラムの内容については概ね満足度が高く、特に、バイオラ大学における研修や看護学部生との交流は非常に満足度が高い結果となった。また、PIH やセント・ジョセフ病院での視察の満足度も高く、研修プログラム全体の評価は良好であった。一方、研修費用の項目において半数を超える学生が満足でないと回答しており、本研修における課題が明らかとなった。また、学生の研修を通しての学び、自己成長については、表 2 に示したアンケートの自由記載欄から明らかとなった。

IV. 考 察

1. 米国における看護の実情

本研修を通して、米国の看護師は日本と比べて自律性が高く、個々の看護師の裁量が大きいことが理解できた。また、米国には NP (Nurse Practitioner)・CNS (Certified Nurse Specialist)・RN・LVN・CNA といった多様な看護師の認定制度が存在し、NP、CNS、RN は看護職のリーダーとして LVN や CNA に役割を委譲しながら看護を提供している現状がある。また、看護師以外にも、心電図やあらゆる機器のモニタ管理をする技師も多様に存在し、各専門職の役割と責任が明確となっていた。武藤¹⁰⁾は、「スキルミクス」という概念について、チーム医療とは違い、さらに一歩進んだ医療チーム内における権限と責任の委譲や、新たな職種の創設を含む概念であると述べている。米国の医療では、従来医師が行ってきた診療行為を他職種や新たな専門資格を創設することで、権限委譲や機能分化が積極的に行われており、スキルミクスが実践されていると言える。現在、日本でもチーム医療が推進され、院内における様々な多職種チーム活動が行われている。また、看護においては病棟や外来では以前から看護助手が配置され、煩雑な看護業務をサポートする体制が構築されている。しかしながら、改めてスキルミクスという視点で考えてみると、日本では米国のように新たな資格の創設や権限委譲は進んでいない現状にあり、看護

職の役割拡大についても二の足を踏んでいる状況が続いてきた。中村¹¹⁾は、真のスキルミクスには専門職の人材育成が不可欠であると述べている。米国のような質の高いスキルミクスを確立させていくためには、専門性を高めるための看護教育をいっそう充実させ看護の役割拡大や質の担保を図りながら、他職種への役割委譲によって

表 2 研修による学生の学び (アンケート自由記載)

<病院研修>

- ・米国の看護師は日本よりも責任が重く、医師のもとではなく、自身で判断して行動することが多いと感じた。自分も米国の看護師のように適切に判断できる看護師になりたい。
- ・個室で患者のプライバシーが確保され、室内には PC が設置され、効率的に情報提供や看護業務ができる環境であった。
- ・英語が話せない患者のための通訳者に繋がる機器はとても便利であり、国際看護にとっても需要があると感じた。
- ・看護の本質は米国でも変わらないことを学んだ。

<大学での研修>

- ・米国の学生の積極的な姿勢をみて、自分も積極的に行動できるようになりたいと思った。
- ・講義への意欲が高く、少人数学習のため、先生への質問もやすく、自分もこんな環境で講義を受けてみたい。

<異文化交流>

- ・食生活をともにし、ファストフードなどの嗜好が肥満に密接に繋がっていると実感した。スーパーの商品も全てサイズが大きく日本との違いを感じた。
- ・宗教のある生活や教会での様子をみて、日本は仏教や無宗教の人が多く、その人を尊重するためにも宗教に対してもっと配慮すべきであると感じた。
- ・文化の違いを認識し、理解し、コミュニケーションをとることで、看護にも活かせると感じた。
- ・英語に苦手意識があったが、完璧に話せなくてもジェスチャーや単語を用いて一生懸命伝えれば、理解してもらえた。
- ・相手の言っていることや自分が伝えたい気持ちを持ってコミュニケーションすることが一番大事であると学んだ。
- ・積極的に自分から話すこと、話を聞き取ろうという姿勢は改めて大切だと感じた。

<研修における自己成長>

- ・研修を通して、以前よりも何事にも挑戦できるようになった。
- ・研修当初は英語が話せず躊躇してしまっていたが、積極的に自分の思いや意見を話そうという気持ちに変化した。
- ・英語力がかなり身に付き、看護に対する考え方も成長した。今までよりもよく考えて行動しようと思うようになった。
- ・自分にとって看護師像が広がった研修であった。
- ・学年を超えて交流でき、先生方と多くの事を学ぶことができた。色々な刺激を受け、自分の成長に繋がった。

ケアの効率化を推進していくことが重要であると考え。

井上ら¹²⁾は、クリティカルケア看護師の侵襲的医療処置の実施状況について調査した結果、いわゆるグレーゾーンと言われる 24 項目の医療処置のうち、11 項目は日常的に看護師が実施していることを明らかにした。看護師の実施率が高かった医療処置の中には、鎮痛剤の量調節、ウイニングダイアル調節、NPPV の調節など高度な臨床判断が求められる内容も含まれており、看護師は独自に臨床判断しても医師へ提案や相談をしたうえで実施している現状が明らかとなった。現在、特定看護師や診療看護師の養成が進んでおり、日本においても看護師の役割拡大の動きがみられている。パイオラ大学の教員との意見交換では、グレーゾーンの中で看護師が診療行為を行う危険性について指摘された。訴訟大国の米国では、個人に対して責任が問われる背景がある。個々の看護職の裁量が大きい分、判断した内容や実施した行為への責任が大きく問われる現状にあり、それぞれの専門職の役割や線引きが明確にされる必要がある。たとえば日本のように医師に相談や確認をした上で実施したとしても、万が一、訴訟となった場合に覆される可能性があるとの指摘があった。また、井上ら¹²⁾は、役割拡大されないことによる弊害にも目を向ける必要であると述べており、看護師が自律して臨床判断し、実践できることで、患者や家族中心に治療やケアを進めることができると考えられる。これらのことから、法的整備やガイドライン等の整備とともに、看護基礎教育から適切に臨床判断できる看護師を養成していくこと、臨床看護師の教育体制の充実を図ること、さらには高度看護実践者の育成教育の充実によって積極的に役割拡大を進めていくことが今後の医療・看護の進展に重要であると考えられる。

2. 国際交流活動による学生の学びと成長

本研修に参加した学生の半数以上は初めて海外に渡航する者であった。文部科学省¹³⁾によると、日本人の海外留学者数は 2004 年をピークに減少しており、18 歳人口千人あたりの日本人留学生数は横ばいで推移している。また、大学間での協定等による日本人学生の海外派遣は少しづ

つではあるが増加傾向にある。留学を阻害する要因には、就職への影響や経済状況、大学の留学体制の整備の問題、語学力の問題等様々な要因が考えられるが、現代の若者の内向き指向も大きく影響すると考えられる。本研修への参加募集について、事前アンケートでは海外研修に関心のある学生の割合は高かったものの、実際に参加希望した学生は少数であった。興味・関心があっても実際の応募に繋がらない背景には、実習への影響や経済的問題、語学力の不安などが実際に学生の声として聞かれた。

参加学生は、米国の医療や教育、文化に触れることによって非常に大きな刺激を受け、自己成長を強く実感していた。現地で働く日本人看護師や大学教員から具体的な助言や体験を聞くことによって、単なる興味から、実際に自分も海外で働いてみたいという意識に変わる学生もみられた。ホームステイ体験では宗教に触れることによって、多文化をもつ対象への看護やスピリチュアルケアに関連づけて考えを深められる学生もいた。語学力の不安をもちながらも現地の人々とかかわることで、英語力の向上のみならず、学生の積極性や主体性が引き出され、非言語的コミュニケーションを織り交ぜコミュニケーションを図る姿があらゆる場面で見られた。参加学生は、様々な場面で自律的に行動しており、現地で積極的に知識を吸収しようとする主体的な学習態度が自然に引き出されていた。さらに、米国の学生のアクティブ・ラーニングの実践をみることで、自らの学習態度を見つめ直し、主体的に学ぶことの大事さに気付いていた。このことは、今後の行動変容に繋がることが期待された。そして、今回の研修を機に、何事にも挑戦することの大切さを学び、今後、自身がどのように看護職としてキャリア形成していきたいか、どのような生き方をしていきたいかについて、前向きな希望をもって具体的に考えることができるようになったと考える。以上のことから、参加学生は研修を通して、自己の内面の変化に気づき、自己成長する機会を得るとともに、グローバルな視点で看護を考えることや、多文化共生についての意識が向上したと考えられる。また、研修で養われた積極性や主体性によって、その後の学習態度の変容や看護職としてのよりよいキャリア形成を期待できると考える。

3. 国際交流活動の今後の課題と展望

筆者らは、看護学部において初となる海外研修を企画・運営することとなり、米国において長年の看護師経験をもつ教員を要に、あらゆることを模索しながらなんとか実施にたどり着いた。

現在、私立看護系大学における国際交流活動は組織的に活発に行われており、海外留学や海外研修を大学の特色として広報活動される場合もある。本学においても積極的に国際交流活動を推進していくことは大学の魅力や特色に繋がるものと考えられる。多くの私立看護系大学では、国際交流センター等の独立した組織部門を設置し、大学予算で運営されている現状にある⁴⁾。国際交流センター等の組織をもたないまでも、教員・大学・事務が協働して運営している場合が多く、本学のように教員のみで実施している割合は最も少ない⁴⁾。また、本研修は、看護学部独自の海外研修であり、活動が予算化されていない状況の中で実施しており、引率教員の負担は大きかった。今回、米国の医療に精通し、語学が堪能な教員が引率者に含まれていたことで、医療施設や大学で行われた講義において、看護学の専門的知識を踏まえた質の高い通訳の役割を果たすことができた。しかしながら、国際看護の経験や現地での学習支援ができる教員が少ない現状を考えると、今後は引率教員の語学力向上を含め、研修経験や自己研鑽を積んでいくことが必要である。国際交流活動をする上での課題には、人材不足、教員への負担、資金不足、引率教員の語学力の問題が挙げられている⁴⁾が、本学においても他大学と共通した課題があると言える。

山口ら⁶⁾は、看護教員が国際交流活動に参加することによって、語学力の向上やグローバルな視点を養う機会となると述べており、海外研修を通して学生とともに教員も学び、成長することが今後の国際交流活動の発展に繋がるものと考えられる。

本学看護学部における国際交流活動を今後も発展的に継続させていくために、まずは学生の語学力や渡航への不安を解消することが必要であり、広報活動の工夫や早期から事前学習を推進していきたい。これらによって、

学生が積極的に海外研修に参加できる環境づくりをしていきたいと考えている。さらに、研修中には、学生が知識と経験を統合できるような効果的な学習支援のあり方について検討していきたいと考える。

さらに、本当の意味で国際交流を実現していくためには、単に一方的な短期研修を実施するだけではなく、大学間または学部間での協定を結んだ上で、双方の学生および教員が互いに行き来し、積極的に学術交流できる環境づくりが望まれる。

謝 辞

本研修を実施するにあたり、研修プログラムを綿密に調整してくださったバイオラ大学の Akiko Kobayashi 准教授をはじめ、研修を快く受け入れてくださった PIH、セント・ジョセフ病院、サウスベイ・ヘルスケアセンターのスタッフの皆様、ホームステイにご協力いただきましたホストファミリーの皆様、国際交流活動をご支援してくださった本学関係者ならびに看護学部教員の皆様に心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 総務省ホームページ： http://www.soumu.go.jp/main_content/000539195.pdf 多文化共生の推進に関する研究会報告書，2006。（2018年6月アクセス）
- 2) 日本看護協会ホームページ： https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf 看護者の倫理綱領，2003。（2018年6月アクセス）
- 3) 日本看護系大学協議会ホームページ： <http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf> 看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（2018年7月アクセス）
- 4) カルデナス暁東，西頭知子，月野木ルミ，他：日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査，大阪医科大学看護研究雑誌，3，147-156，2013.
- 5) 濱畑章子，片岡由美子，米田雅彦，他：看護学生

- の国際交流に関する意識調査, 愛知県立大学紀要, 10, 27-32, 2004.
- 6) 山口さおり, 稲留直子, 八代利香, 他: 学生海外研修における大学教員の役割と今後の課題, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 26(1), 73-81, 2016.
- 7) 田代麻里江, 巽 彩香, 藤田 栞, 他: 2015 年度国際看護学演習 米国カリフォルニア州における海外看護研修報告, 梅花女子大学看護保健学部紀要, 6, 33-44, 2016.
- 8) American Nurses Credentialing Center ホームページ: <https://www.nursingworld.org/ancc/> (2018 年 6 月アクセス)
- 9) 全米日系人博物館ホームページ: <http://www.janm.org/jpn/jpnprogram/jpnlessonplan.pdf> 移民を授業する (2018 年 6 月アクセス)
- 10) 武藤正樹: 真のスキルミクスとは, 日本クリティカルケア看護学会誌, 6(3), 4-7, 2010.
- 11) 中村恵子: スキルミクスから考えるチーム医療と人材育成, 日本クリティカルケア看護学会誌, 6(3), 1-3, 2010.
- 12) 井上智子, 佐々木吉子, 川本祐子, 他: クリティカルケア看護師の侵襲的医療処置実施と医療機器装着時の生活行動援助ケアに関する全国調査, 日本クリティカルケア看護学会誌, 6(3), 26-36, 2010.
- 13) 文部科学省ホームページ: <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/dai2/sankou2.pdf> 若者の海外留学を取り巻く現状について (2018 年 6 月アクセス)

The Report on the 2018 Study Tour to California in U.S.A. for Nursing Students

Satoko MORIYAMA¹⁾, Fusako SATO²⁾,
Yoshiko KOZAWA¹⁾, Akiko HAYASHI¹⁾

1) Faculty of Nursing, Suzuka University of Medical Science

2) Aichi Medical University

Key words: Study tour, International exchange, Nursing student, U.S.A.

略 歴

森山 小統子 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 助教

学 歴：

平成15年 三重大学 医学部 看護学科 卒業

26年 三重大学大学院 医学系研究科 修士課程 看護学専攻 修了

職 歴：

平成15年 虎の門病院分院 看護師

18年 刈谷豊田総合病院 看護師

26年 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 助教

主な研究分野：

老年看護 認知症ケア

